

『宣和奉使高麗図経』の『図解』の再現について

なか ぎり いさお
中 吉 功

わたくしは長く海東の仏像彫刻に感心を寄せてきたが、浅学非才のために朝鮮の古典を十分に熟すことができないのを非常に残念に思っている。特に新羅・高麗の仏像を研究するには、文献はもとより金石碑文に眼を向け、て仏教関係の資料を探さなければならぬのは自明であるが、ときに中国の古い文献をも参考にしなければならぬ。殊に高麗は宋・元との密接な交流があり、特に美術・工芸に感心をそそぐものには見逃しがたい重要事項である。その一つが本稿の主題とする『宣和奉使高麗図経』である。

この書は宋の徽宗皇帝の宣和五年高麗仁宗元年(一一三三)に宋の正使給事中路充迪、副使書舍人傅墨卿の下に提轄官となつて高麗に使用した徐兢の撰述した報告書である。かれは王都開城に留まること約一ヶ月、その間耳目の及ぶところ、あるいは高麗人から多くの所説を録し、自国と異なるところを記述して二十八門に分ち、更に細別して三百余條に分類して、殊に造形的なものにはこれを図(今日では寫真挿圖にあたる)に示し、これに説明の文章を加えたものである。いま四十巻の目録を掲げる繁をさけるが、大体は次のごとくである。すなわち高麗の地理、

宮城、人物、風俗、典章、制度、祠宇、儀式、器皿、往来路等を詳記するものである。これを皇帝に奉呈したが靖康の変においてその図の方は亡んで今残るのは文(経)のみである。それが宋代に流布して刊行されたが、のち明代におよんで重刊されたこともある。清の乾隆年間(一七三六―九五)にいたり、鮑廷博の『知不足齋叢書』に収めたのを基にして明治の末葉釈尾氏によつて朝鮮古書刊行会から翻刻されているのが現在流布されているものである。

ところが今西龍博士は藤塚郷教授(當時京城大学教授)の教示により、宋の乾道年間の刻本が奇蹟的にも一本が清帝室の故宮昭仁殿に蔵されていたものがのち北京の故宮博物館に移蔵され、それが天祿琳琅後目に著録されているのがわかり、また清人蔣光照の輯補偶録にも『知不足齋本』がこの乾道刻本をもつて校正したとの記事があつて、ここに今西博士はあらたに求めた『知不足齋本』を原本として昭和七年一月『朝鮮学叢書』一として自費出版されたのである。わたくしは今西先生歿後、賢息春秋氏からこの印行本の惠贈にあずかつた。

いまわたくしの使用する高麗図経はこの今西博士印行本を使つてゐることを断つておく。
わたくしは本書の書誌学的なことは任でなく、ただ興味と感心をいざるところだけを取りあげることにする。それは第十七巻、祠宇の項と第十八巻、道教と釈氏の項で共に高麗の仏教史研究には見逃すことのできない重要な記述である。

まず第十七巻の祠宇の項の目次をあげる。福源觀(道教廟)、清国安和寺、広通普濟寺、興国寺、国清寺、王城内外諸寺、崧山廟、東神祠、蛤窟龍祠、五龍廟の記述であり。つづいて第十八巻、道教、釈氏の項では、道教、道士のほか釈氏、国師、三重和尚大師、阿闍黎大德、沙彌、比丘、在家和尚等についての叙述であり、つづいて第三十巻、器皿一では、獸炉、水瓶、盤棧、博山炉、酒檮、鳥花洗、面葉壺、芙蓉尊、提瓶等の叙述であり、第三十一巻、器皿二では、油盞、淨瓶、花壺、水釜、水盃、湯壺、白銅洗、鼎炉、温炉、巨鍾等の叙述がある。第三十二巻、器皿三では、茶俎、瓦尊、藤尊、陶尊、陶炉、食罩、藤篋、鸞釜、水釜、草苫、刀筆等を叙述している。これら

は専ら儒・仏・道三教等の儀式に使用した器皿の名称ではないかと思われる。

さて高麗陶磁の研究者がしばしば引用するのは卷三十二、陶尊の條に記述する次の文章である。

陶器色之青者、麗人謂之翡色、近年以来制作工巧、色沢尤佳、酒尊之状如瓜、上有小蓋、而為荷花伏鴨之形、復能作盤椀栴檀花函湯棧、皆竊倣定制制度。故略而不図、以酒尊異於他器、特著之、
とあり、つづいて陶炉の條には、
發。猊。出。香。亦。翡。色。也。上。有。蹲。獸。下。有。迎。蓮。以。承。之。諸。器。惟。此。物。最。精。絶。其。餘。則。越。州。古。秘。色。汝。州。新。窰。器。大。概。相。類、

とあり、つづいて食罩の條には、
公。會。供。饌。下。承。以。盤。上。施。青。罩。惟。王。与。使。副。加。紅。黃。之。飾。所。以。別。精。鹿。也、

とあるのが注目される。このように徐兢は高麗陶磁について特にその優秀なことをことごとまかに記述し、自国の越州、汝州兩窯と比較しているのが留意される、これらの文章を読むと韓国国立中央博物館に所蔵される青磁梅瓶や發猊香炉を如実に文章に綴つたのではないかと思われふしがある。わたくしにとつては特に感銘深いものばかりである。

◇

◇

以上のごとく高麗のあらゆる文化面にわたつて徐兢の俊敏な觀察は後人の敬仰するところである。しかるに前述したように靖康の變にあり、その図を亡失したのは惜しみてあまりあるところである。

わたくしは何とかして図解を再現したらと考えるものである。これはわたくしの発想ではなく、昭和八年の初春の頃わたくしが京城帝国大学に勤めていたとき、当時法科外交史担当の教授で朝鮮美術にも造詣の深い故奥平武彦先生が、当時京都画壇の雄土田麥僊画伯を同伴して美学研究室に田中豊蔵先生を歴訪されたことがあった。そのときわたくしは助手であり、階下の民俗品参考室に同画伯を案内した。画伯はそこに陳列してある朝鮮式の胡座

を興味深く写生された。のちその胡座の上に横向きに坐わる妓生の蒲酒で気品のある肖像画こそ、麥僊画伯の独自の画品の高い画風を示したもので永く記憶にのこる傑作である。それが同年秋の帝展の特選作となり朝野の注目をひいた『平牀』である。そのモデルとなつた妓生の名は当時京城随一の評判の高かつた李翠玉女史であり、その姉君李翠松女史はすでに妓生を引退していたが、同じく妓生の徐菊秀女史らと共にいずれも当時美人の誉れが高かつた女姓である。これら三氏は京城本町にあつた旅館天真楼に宿をとつていた画伯の都屋に来てモデルになつたとのことである。『平牀』の妓生はたしか李翠玉女史とうかがつている。これは余談であるが五十数年前の逸事である。

麥僊画伯の兄君こそ、異色の美術史家土田杏村であるが、この兄にしてこの弟ありで、麥僊画伯もまた並の画家と異り、『宣和奉使高麗図経』の缺失部の図を再現したいと考えていたらしい。これはおそらく奥平教授と田中豊蔵両先生からの示唆に依るものではないかと想像される。この考えは凡庸の画家の考え及ばざる深慮にほかならないとわたくしは心底より感銘を深め、爾来五十数年心の底にいつの日か実現できればと願望している次第である。

さてこれに従事する画人を探することは仲々容易なことではないであろう。名利を捨て我慾を離れ、ひたすら古典を追究して図解一途に生涯を捧げる覚悟の画人でなければ到底為し能わぬ難事業と思われるからである。

ここでわたくしは考える。韓・中・日三国の文化事業の一環として奇特の画家達を選び、この画家達を支援する幾人かの歴史家(考証を得意とする)も加えて一つのプロジェクトチームをつくり、自由に図解の画業に専念せしめる企圖である。さすれば靖康の變以来絶えて久しく見られなかつた『宣和奉使高麗図経』の缺如した『図』を復活させ、少しでも原初に近い『図』を復元することによって徐兢の撰述した当時の姿に復元することができるのではないかと思う。それには後顧の憂いのような経済的援助が必要である。

古典、稀覯書の復刻は出版界において汗牛充棟もただらないが、文辞、文章以外の図解の缺を補つて往時の

姿に復元するのは稀有の文華事業に属することで、ここに『宣和奉使高麗図経』は原初に近いものになるのである。文中いささか余談に走り、本旨にそくわな方向に脱線したが、老耄の^{まこと}語としてお聴き捨て願いたいと思ふ。

(注) なお今西龍遺著『宣和奉使高麗図経』(昭和七年八月発行)の今西龍先生叙述になる「後記」参照。朝鮮史学の泰斗今西先生のご生前、最期の研究、校正にあたられたのは『宣和奉使高麗図経』であつたことを謹記する次第である。